



佑 啓

社会福祉法人 佑啓会
〒290-0204 千葉県市原市一里三丁目6番11号
電話 0436(36)7611
編集 里見吉英

幸福の黄色い学舎に

佐野志津子

平成五年四月六日、快晴の竣工式でした。建設中の高層道路をくぐると、このような施設では珍しい黄色の壁面に囲まれたふる里学舎が、ひっそりと翼を広げたような形で、あたかも私を迎えてくれました。以前から不足する知的障害者の施設づくりに意欲を燃やしていた古川弘さん、里見吉英さんから、いよいよ始まるので準備委員として協力して欲しいと言われたのは平成元年の春でした。

準備委員から社会福祉法人の理事へというお話は、次男が袖ヶ浦浦祉センターで両親にお世話になっている縁があるとはいっても、の専業主婦の私には重荷であり、戸惑いもありました。しかし千葉市精神薄弱者育成会の活動に二十年程かかわってきた経験を生かし親の立場から、その建設や運営に意見を反映して貰いたいとのことで結局、お受けすることになりました。

準備委員会に集まったメンバーは、各分野にわたる素晴らしい方ばかりでした。この第一回の席上で法人、施設づくりのスケジュールについて、目を離かせながら説明していたお二人の姿が今も浮かんでまいります。

事前に不動産の専門家の協力を得て建設候補地を決め、県や市の事前指導を受け直ちに法人の設立や土地造成に入り、平成三年の春には施設完成という計画でしたが、土地取得でつまづき候補地が二転、三転いたしました。

福祉施設の土地取得では地主さんの理解や価格問題だけでなく、周辺の方々のご理解を戴くことが最大の難関とされていきます。

佑啓会にとって最も辛いこの時期、お二人を支え事務局を担当した三股さん、長良さんのためまね熱意には、心から敬意を表します。それにもまして、自らもご理解を

得るべく何度も足を運び、丁寧に頭を下げておられた里見施設長のお父様、吉朗さんのお姿を私は忘れることができません。

福祉の仕事に携わるご子息の気持ちに理解し、その理想実現のため、三億円にものぼる土地や資金を提供されたうえでこの行動には、只々頭の下がる思いでした。

このような経過を報告する理事会でも黙って静かに笑っておられたお人柄が、佑啓会を支えているのだと今でも思っています。

私は今、千葉市育成会を法人化し通所施設をつくらうと設立準備委員になっていますが、当面目標とする五千万円の資金づくりに苦戦しております。この先、土地取得等考えると、その実現は生易しいものではないという気がいたします。

しかし親たちが協力し、その努力をしなければ「施設がオープンすると、まるで椅子取りゲームのようになってしまふ」という状態が改善されることはないでしょう。

ふる里学舎でも早速家族会が設立されたとのこと、宮嶋会長さんのお言葉のように入所者の家族の方には、この施設がよりよく整備され、健全な運営ができますように精一杯のご協力をお願いしたいと思っております。

準備段階から協力下さった委員の方は、井上さん(元県社会福祉事業団理事長)を後援会長として応援活動をされています。この施設設計、建設に携わった方をはじめ、多くの方からふる里学舎をバックアップするため賛同者を募る運動をしていくのです。

行政機関や一般の方々に障害者の福祉に理解を求めることは、決して易しいことではありません。ふる里学舎の新しい歩みは確実に知的障害者の福祉を前進させ、多くの理解者を得ることになるでしょう。

珍しい建物の黄色には、設計者の熱い思いがこめられていると聞いております。大好きな山田洋次監督の映画「幸福の黄色い

ハナカチ」のラストシーン、あの無数に散らばった黄色のハナカチも感動的でした。ふる里学舎は建物全体が黄色なのです。名実ともに「幸福の黄色い学舎」にしようではありませんか。(佐野志津子・理事)

八月十七日から一泊の予定で、松戸善美君が我が家へやって来ました。

善美君と息子の裕は袖ヶ浦福祉センターで一緒に生活していた関係で何度か顔を合わせたことがありました。

そうしたこと預かることに、関しての不安はありませんでした。むしろ、センターでの二年間を通じて色々な事情のある子供達に接し、息子の裕の成長のたびに一人でも二人でも、一緒に連れて帰れないものかと思っておりました。

今日、何より嬉しかったのは善美君が「裕ちゃんの家に行く」と言ってくれたことです。

これまで第一関門は突破した訳です。あとは短い時間内にみんなでお集まりの計画を立てればいいのです。ところが、一緒に眠るはずの大学生の長男は後動アルバイトが入り、主人も折衷して急な出勤で夕食は私と子供達だけとなり、予定はすっかりくもってしまいました。そこで二人に手伝わせて、五日間をやり片付けようと思いましたが、それが結果的に私と善美君の距離を近づけることになり良かったようです。

次の日、全員顔を合わせたのは九時頃で、朝食後は無理に味の相手をさせられましたが、ニコニコして大爆笑を繰り返してました。

昼食後、主人も一緒にスーパに出かけ、せっかく来たのだから夕食は家で焼肉をしようということになりました。私と裕二が食卓の支度をしていた間、善美君は主人と二人でお風呂に入り、体中ゴシゴシ洗ってもらい出たからは長男が髪をセットするやらで、息子が一人増えたみたいでした。

善美君がいるということ、家のいつもの雰囲気が変わるとか気を遣ってギョギョとするとか、まったくなく、一泊二日の体験は無事終わりに近づいてきました。

夕食後、私と二人で家を出て、途中リリクの本を持参した小遣いでもとめ、二時間ほど夜のドライブをして、先生の待っているふる里学舎に到着しました。

車から降りると善美君が「一回泊りたい」と言ってくれました。

彼についてはセンターにいた頃ホームステイの経験がきっかけで計画したところ、土壇場になって行きたがらなくなりキャンセルしたという話を先主から伺っており、まさか、まさか、この言葉が聞かれた時は胸が熱くなりました。

このような機会を与えて下さったふる里学舎に感謝し、今後一人でも多くの万歳がホームステイ・ボランティアを体験され、またこの願いがかなうよう付け加えておきます。

ホームステイ・ボランティアを体験して

渡辺富美子



精神更生施設
ふる里学舎
新しい試みを
織り込みスタート
指導者更生施設、ふる里学舎(施設長、里見吉英)が、この四月開所、職員三十名、入所者六十名(十五才以下)で新しい施設作りに取り組み始めている。同施設は、従来の更生施設に加えて、心身障害者のショートステイと、外來の相談事業と、中核プログラムが備えられ、「収容施設ではなく開放された職員も家族も楽しく自然に生活してゆける所」にしたいと施設長の里見さんが語るように、明るい山吹色の建物(宝善が印象的。いちばら朝日の掲載記事より)

10月からふれあいホームが発車いたします。
また、療育相談も承ります。
お気軽にご連絡ください。
ふる里学舎 0436(36)7611



僕の夢

僕は五月一日に入所しました。最初は友達もいなくて名前もわかりませんでした。だんだん友達もふえ、名前も覚えてきました。一番はじめに友達になった人は、岩崎真由美さんでした。岩崎さんと仲良くなったことがきっかけで、岩崎さんと友達になれてうれしいです。

作業は、土起こしをみんなで二日間かけてがんばりました。暑い中大変だったけど一生懸命がんばりました。今、実習農地に行くと、畑をやっていて、すごく大変だけど一生懸命がんばっています。職員が少ない時は、ふる里学舎に残って、土運びと部屋の前の整地をやっています。山の上にあるのがすごく大変で疲れるけど一生懸命がんばっています。部屋の前のまじまじと土がたまってしまうので終わります。けっこう疲れるけど、将来のことを考えて一杯がんばっています。

障害の重い人もいれば、軽い人もいろいろいます。わからない人は、人の部屋に入ったり人のものをいじったり、こわしたり木に当たったり、人のいやがることをやったり何でもできて皆すごく助かります。わからない人だててやさしくしてすごく楽しいです。

先生方も話を聞いてくれたり、遊んでくれたり楽しいです。外出もあるし、いろいろな行事があって楽しいです。

将来は、ラーメン屋さんになりたいと思っています。それが小さい頃からの夢でした。調理師免許を取ったら皆の先生に食べさせてあげたいです。今年中に実習をやったアルバイトをはやめ、ここでたくましく勉強したいです。ここにいる間がんばって作業をやり、先生方のおっしゃることをよく聞きながら仲良く先生方とよくしゃべりたいです。これからは自分のペースで一杯がんばります。

— 岡 正雄 —

「吉川さん おはよう」
「おはよう」
寮生の元気の挨拶とともに、私の一日が始まります。四月の頃は私は、不安だらけの毎日でした。施設で働いた経験のない私が、職員としてやっていくのだから、永く勤められるだろうか。そんな心配ばかりのスタートでした。早、六ヶ月、月日が経つのは早いものです。七年間、大病院で受付事務をしてきた私が突然「仕事を辞めて施設で働きたい。」と言うと、周囲の友人は一概に反対しました。「別に今更好きで大変な仕事をしなくても……」等言われました。しかし私は、今ここで諦めなければ一生悔いを残してしまうと思ったのです。確かに七年間勤めた職場を変わることは、勇気も要ります。また、受付事務から一八〇度方向転換した施設職員になるということは、不安でもありました。でもそれ以上に自分の力を最大限発揮できるところで頑張りたい、と言う気持ちのほうが強かったのです。

転職して六ヶ月

指導員助手 吉川 昭代

そして二月、七年間勤めた大病院を退職しました。
無我夢中で働いてきた六ヶ月には、様々なことがありました。最初の頃は、どう対応したらよいかわからなくてただオロオロとしてばかりいました。しかし毎日寮生と暮らしていくうちに、その場に合った対応が徐々にありましたが、わかっていくようになっていきました。以前の受付事務のように話しかけてくれるのを待っていても、彼等はなかなか心を開いてくれません。積極的にこちらから飛び込んでいかなければ一つのことを共有できないと思います。とは言っても、理想と現実のギャップはあります。福祉というものを美化し過ぎていたのかもしれません。共に生活していれば、奇麗事で物事は進みます。時には大声を上げたり、本気で叱ったりすることもあります。もっと大らかな気持ちで接したいと思ってもつい自我が出てしまうこともあります。しかしそれも人間相手の仕事だからそのことではないでしようか。こちらが寮生のことを真剣に考え、誠意をもってぶつければ分かってくれると思います。自分のやりたい仕事が見つかり、またその職に就けることは少ないと思います。けれど、私は幸運にも自分の好きな道を歩き始めています。

今後も、寮生とともに成長し、少しでもその生活が向上するよう頑張りたいと思います。

「脳と神経の病気いろいろ」
脳卒中について ①
今朝の風に、秋を感じるようになりました。私が栄養士として、このふる里学舎に勤務するようになって、六ヶ月が過ぎようとしております。以前の勤務を取り戻そうとすればするほど、あせりがでてしまひ、自分自身納得する食事を、出すことができていないのかと、毎日自問自答を繰り返してはいます。開所した頃は、誰もがふる里学舎の一年生で、職場で初めての仲間と一緒に、新しい厨房機械に振り回され、汗を流しながら、力を合わせて今日までやってきました。そして今では、厨房機械を私達が使いこなすところまで進み、配膳の時、お互いに顔馴染みになってきた食事準備をする寮生との話合いにも、言葉が弾み、楽しい一時を過ごすことができるようになりました。

こうして、厨房が落ち着き、徐々に私自身を取り巻く回りの様子を捕らえることができるようになってきました。しかし、これで私の仕事が終わったわけではありません。まず、施設長が理想とする一般家庭と同じ時間帯に食事がとれるようにすること、また、各テーブルでの炊飯、キャフェテリア方式の配膳の導入、というまでには、まだまだ時間がかかりそうです。今後、一番大切な栄養面、嗜好面などを配慮した献立作成と、一定の手算の中でそれをどう満足させるかを課題に取り組みたいと思います。

栄養士 石井由紀子

今回から数回にわたり、脳卒中のお話をします。脳卒中とは突然起こるという意味で、今まで元気だった人が突然意識を無くしたり、手足の麻痺や言語障害を起すのが本質で、周囲の人にもあててしまひ、また脳卒中は長い間、日本人の死因の第一位で、高血圧の治療や食事に対する注意が一般に浸透して、脳卒中の発生は減少しましたが、死に別れる人は減少しませんでした。しかし、たとえ命は取り留めても生活に支障をきたす後遺症に悩んでおられる方は、数多いことも事実なのです。最近では、欧米型の生活様式になり、脳卒中も以前と異なり出血の割合が減り、梗塞が主となっています。

脳卒中とは一体どのような原因として皆さんがよくご存知なのは、高血圧です。確かに血圧が高ければ、血管はもろくなり、血管が破れ、出血が起きます。出血が起ると、神経の中核である脳へ栄養を送っている血管に障害が起きます。出血が起ると、脳が壊れ、機能が失われます。出血が起ると、脳が壊れ、機能が失われます。出血が起ると、脳が壊れ、機能が失われます。

編集後記
編集を終えるとき、いよいよ中盤の上の顔を見せたい。血管はもろくなり、血管が破れ、出血が起きます。出血が起ると、神経の中核である脳へ栄養を送っている血管に障害が起きます。出血が起ると、脳が壊れ、機能が失われます。出血が起ると、脳が壊れ、機能が失われます。出血が起ると、脳が壊れ、機能が失われます。

